

華西医科大学口腔医学院 I



空港からポプラ並木が、薄暮の道を果てしなくつづく。気は張りつめているものの、どこか懐かしい感慨をおぼえる。

まもなく、大きな橋の袂に建つ格式ある洋風の錦江飯店ホテルに着く。当時は、外国人専用のホテルであった。あとで川の対岸は、華西医科大学のキャンパスと知る。

すぐに、一階のレストランに案内された。空腹の私たちの一人が、日本の調子でビールを注文した。王歯学部長は、あわててボーイに指示した。彼は立ったまま、ソワソワしていて落ち着かない。ビールがきたので、「一緒に」と誘うと、減相もないと片手を振って早々に出て行った。このホテルは、中国人の入館は禁じられているらしい。

疲れきった私たちは、中国の青島ビールで乾杯した。とにかく無事、文化大革命10年後の成都に辿りついたと祝った。ビールは、まるでぬるかった。ビールを冷やす習慣はないらしい。

翌日、私たちのために旧式の公用車二台がまわさ

れた。口腔医学院（歯学部）には、玄関一面に彩色した手書きの歓迎パネルが飾られていた。歯学部の幹部はみな年配者で、人民服を着た教授もいる。小林教授が持参したハノー咬合器に、目を輝かせて取り巻いた。

そのあと、豪華な中華建築の大学本館、一階の広い学長室。曹澤毅学長、王大章歯学部長と私が、姉妹校の調印書にサインを交わした。産婦人科医という曹学長は気さくに、にこやかに笑いをふりまく。ギョロ目の、まるで三国志の関羽のような風貌。調印後、彼は玄関においた自転車に乗って、飄々と漕ぎ去った。

夕刻、歯学部の会議室で歓迎夕食会。アルコール類はなく、温めたオレンジ・ジュースで乾杯した。王歯学部長が嬉々として、幾度もカップを合わせて座を盛りあげる。

「カンペイ！、カンペイ！」

(写真は、中央の私の左は曹学長、右に王歯学部長)